

看 護

札幌市立大研究G

AI技術用いた実証研究

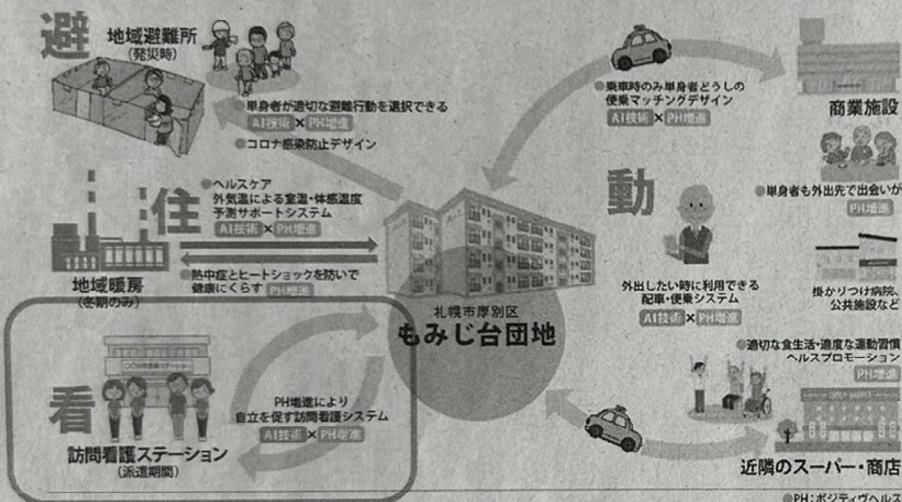
高齢者の移動・訪問サービスでPH増進

札幌市立大の看護学部を含む研究グループは、札幌市厚別区のもみじ台地区在住の高齢者を対象に実施したオンデマンド型乗り合いタクシーの実証実験の結果を公表した。人工知能(AI)技術を活用し、高齢者が外出したい時に最適経路で乗り合いタクシーを配車

するもので、実験参加者の85%が「外出の意欲が高まった」と回答。外出・便乗を支援することで、家に引きこもって孤立しがちな高齢者の社会的つながりを創発するポ

ジティブヘルス(PH)増進につながる事が分かった。実証実験は、高齢者が最も外出を控える積雪期の今年2月の1カ月間実施。同区内の病院、スーパー、駅、温浴施設など42カ所を乗降場所とし、利用希望者がスマートフォン

の専用アプリから乗車予約すると、AIが運行経路を算出し、ワゴン型タクシーの運転手



もみじ台地区の2040年に向けた計画イメージ

に端末タブレットに表示される仕組み。同地区に住む70歳以上の高齢者29人が利用した。

実験後のアンケートで、利用者の44%が「外出の意欲がとて高まった」、41%が「やや高まった」と回答。また、57%が「車内で知らない人と会話をした」と答えた。

もみじ台地区は、1970～80年代に開発された市内最大の団地があり、20年の国勢調査によると、同地区の高齢化率は49%と、道内の平均を15ポイント上回っている。

PHとは、身体の状態ばかりでは社会的、感情的な要素を取り入れた新しい健康の概念で、PHを増進することによって、自立の促進、生きがいや社会的つながりの創発を目指している。

同大の看護学部とデザイン学部を主体とする研究グループは、市内でも高齢化が進むもみじ台地区をモデル地区に選び、2022～25年の4カ年

で、文部科学省の科学研究費助成事業「AI技術×ポジティブヘルス増進による高齢者の社会的つながり創発モデルの実証的研究」に取り組んでいる。今回の実証実験は、その一環で「動」をテーマに、AI活用による高齢者の移動促進の効果を検証した。

これに先立ち、初年度の22年には「看」をテーマとする実証実験を実施しており、地区内の高齢者の看護、リハビリの訪問サービスにAIを活用。タクシー会社と連携して訪問看護ステーションのスタッフを最適な経路で送迎する実験を行った。

今年の冬から来年の夏にかけて「看」と「動」を組み合わせた実験を予定している。

研究グループの齊藤雅也教授は「高齢者のPHを向上する生活支援サービスを向上して、自走できる仕組みを模索したい」と話している。

けあ

23年度補

2次医療圏	病院数
南渡島	34
南松山	5